

猛烈な吹雪だった。一步先すら見えない白き闇の中を、スウインドタップを頼りに歩いている男がいた。

「汎宇宙盟約星系の外に逃げるとは無茶をする」とレビンはつい声にした。

パラライズしたせいで、レビンがひきずる脱走囚ギョメの体はずいぶんと重い。

汎宇宙盟約は、一定レベルの文化規範を備えた星と星の間でしか結べない。この厳寒の星ハレクリナは、文化規範レベルはマイナス二十五。大地が丸いという事すら知らない生命体しかおらず、とてもではないが、他の星系はおろか、異星の知的生命体が存在することも知らせてはならないのだ。宇宙警察服務規程においても、盟約外行動だけは厳しく取り締まられている。

知的レベルのギャップが大きすぎる生命体個体の交流は、多くの場合不平等貿易を急激に拡大してしまい、その結果、極悪な侵略から異星系間紛争に拡大する。これまでに例外はなかったのだ。紛争は決して終わることなく続き、最終的には反抗する知的レベルの低い生命体の殺戮が横行することになるのだ。

「あんな悲劇を引き起こすわけにはいかんからな」とレビンは思いながら、なんとか自分のポデイにたどり着いた。

しかし、やはり破損が大きくこれで宇宙に戻る事は不可能だろう。レビンはスウインドタップに話しかけた。

「ポデイ・アルタイムが破損。本船へ戻れない。脱走者は確保。収監機を頼む」

「破損ですって？ 何したんですか室長、じゃねえや、副統合官」

返事したのはマトだった。吹雪のせいか電波状況が悪く返事にもずいぶんと雑音が混ざる。

「ギョメのポデイに体当たりしたんだ」

「体当たり？ またそういう無茶を！」

「現地人と接触させるわけにはいかん。雪原内で捕らえる必要があったのだ」

どうしてもマトには、つい言い訳をしてしまう。それがなぜなのか、レビンにも良くわからなかった。

「収監機は出せませんが一機しかありませんよ。それも遺体確保用の。脱走者を確保しても、副統合官は戻れませんよ！」

「それでいい。コッチュの戦隊がヨハミネ星域にいたはずだ、あつちからアイバニーでも応航してもらえるように頼んでくれ」

マトは「そんな事だから副統合官なんかに追いやられるんですよ」と悪態をつきながらも、予定外の業務処理に対処した。

小さな収監機が到着し、ロンロンギ星人のギョメを押し込んで帰還指令を出すと、収監機は自動航行で、マトの待つ簡易偵察艇コロノに戻り、捕獲された。

雪原の中をレビンは少女の姿になって歩いていった。

ヨハミネからの応航には、このハレクリナ星の時間で二週間にかかる。その間、レビンは誰にも姿を見られないように身を隠さねばならなかった。たまたま、ポディの落下場所近くに、供儀の神殿があることを知ったレビンは、生贄として殺されたばかりの少女の中に入り込んだのだ。

少女の身体の損傷は大きかったが、スウィンドタップに収めておいた体組織修復用のナノマシンパウダーがとても効果的に作用した。遺体が若かったせいだろう。少女が収められていた棺の中に、いまはレビンの本体が、死体潜入発信装置でもあるスウィンドタップとともに眠っている。

レビンはひたすら雪原の中を歩きとおした。少なくとも、この雪山を超えて、反対側の村まで移動しなければならぬ。

供儀の神殿近くでは、この少女を見知ったものはいないはずだ。携行していた栄養剤と、肉体への埋め込み式水分補給装置で体組織の維持はどうにかなるだろう。また意識波の変調方式を複層型に変えて、筋肉レベルを多少強化した。肉体の摩滅スピードは上がってしまったが、多少の無茶は効く。二週間持てばいい。

この星の大人でも一週間はかかる距離を、レビンは小走りのスピードを維持したまま、半日かからずに走破した。

さすがに食事などの栄養補給が必要だと感じた時にレビンは雪の溪谷に小さな集落を見つけた。谷の壁面にある自然の横穴の洞窟に、この星の樹木を組み合わせた扉が付けられていた。おそらくはこの星の原住民達だろう。転がり落ちていのか、駆け下りているのか区別のつかないような体勢でレビンはその村の前の広場に倒れこんだ。

雪の崩れる音に洞窟から何人かの人間が顔を出しレビンの姿を確認した。

乳飲み子を抱えた女が驚いた様子で子供を老婆に預けあわててレビンに駆け寄ってきた。

「アウイニ スイテ ロイロイゴ？ ロイロイゴ？ スイテ！」

意味の分からない言語だった。しかし、レビンはその分からなさに安心した。この生贄の少女の土地とは言語体系まで違うようだ。まったく異国と考えて良いほどだった。少女の残留思念では全く理解できないのだ。

「アメテ ホノ」

後ろから体の大きな男が声をかけた。他にも何人か人がいるようだ。

どの人間にも頭から肩、背中、腰の背面まで白い体毛が生えていた。腕と足にも白い毛が生えている者もいた。

この少女とは人種自体が違うのだ。そう理解できた途端にホツとして、レビンは深い眠りに落ちた。

目が覚めた時、目の前には白髪の老人の顔があった。

「おまえ、ヨセイテだな」と老人は、少女に分かる言葉で言った。ヨセイテは少女の住む

地域の事のような。残留意識でなんとか分かった。

「はい」

と、レビンは無難に答える。

「若い頃しばらくやつかいになった。ヨセイテ良い民」と、老人は絞り出すように言う。

「娘、名前は？」と老人は聞く。

レビンは少女の残留思念を手繰り寄せ、

「コニト」と答える。

「ここ私のウチ。ゆっくりするといい。コニト疲れひどい。ヨロモテ、スイス、モイモレ」

と老人は後ろにいた女性に話しかけた。どうやらスイスという名前の女性に声をかけたようだ。動物の骨の器に暖かいスープのような食べ物コニトレビンの前に置かれた。

その独特の香りがコニトの鼻を刺激したとたん、猛烈な空腹感がレビンを襲った。やはりかなりの肉体的負担をかけていたようだ。コニトレビンは、猛烈な勢いで、その食べ物を匙ですくって食べた。冷えた体が腹の底から温まった。

やっと空腹感が落ち着いて来て、やっとレビンはあたりを見回す余裕ができた。老人とさきほどのスイス、そして、男と思しき個体と、その子供たちが三人、やはり食事を取っていた。

しかし、その食事は見るからに粗末だった。わずかな木の実を少しずつと、温められていない飲み物がわずかにあるだけだ。どうやら雪を溶かして何かの肉で出汁をとっているだけのようだ。

「いいんですか？ あたしだけ、何か違うものをいただいているようですが」とレビンは、その老人に尋ねた。

「おまえ、疲れてる。食べる、役目。ハナ、コニト、ホレ、ワワカヨモイステ、トトイ」後半は、家族に向かって話していた。レビンの言葉を通訳しているようだった。

コニトが何を言ったのかを理解して、若い二人はコニトを見て「いいんですよ」と言うかのようににっこりとほほ笑んだ。

だがしかし、その親二人に抱かれた小さな子供たちはけもの毛皮にくるまねながら、もっと木の実を欲しがっていた。

「このまま、ここにやつかいになるのは問題かもしれない」とレビンは思った。

この少女の体が朽ちたとしても、あの供儀の神殿に戻ってしばらく隠れていけばいいだけの話だ。このままでは、コニトの体の維持のために、この子供たちを飢えのために病气や死亡に至らせかねない。それはどうしても避けなければ。

その夜、レビンはこの村から去るために静かに夜具から抜け出し、洞窟を改装した自分の寝室から外へ出ようとした。

細い岩の隙間を抜けて、外の冷たい空気を感じられるところまで来た時、この村の背中に白い毛を持った二人の男に見つかってしまった。

どうやら、あの老人はこの村の長であるらしく、二人はレビンを見張るように言いつけられていたようだった。仕方なくレビンは寝室へと戻った。

動くに動けず、レビンは打っ手なしになった。なんとか打開策を考えたいのだが、緊急

着陸したため、この星の文化も言語も価値体系も何もかもが不明のままだ。せめてスウィンド・タップが手元にあれば各種の情報も調べることができるのだが、自分の本体を維持するために、棺の中スウィンドタップを残さざるをえなかった。今は何を調べることもできなかつた。

眠るに眠れず、レビンは考えるでもなく考えていたが、レビン本来の、技術志向の発想がひとつの思いつきを大展開させていた。

「ザウエルが私を意識波を使って閉じ込めたやり方を応用すれば、面白いことができるかも知れない」

そう考えたレビンは夜具の毛皮を跳ね除けてその上に座り、コニトの体幹を一直線に伸ばした。目は軽くつぶる。

コニトの残留意識にアクセスして、レビンの持つ棺桶システムの知識をコニトの残留意識に伝達し転送してみる。コニトの体は若く、残留意識も柔軟性が残されていた。面白いように知識のコピーが可能だった。

「これは面白いぞ」とレビンは思い、コニトの意識を使ってレビンの本体の操作ができなさを試してみた。しかし、どうやら意識波の到達率が低いらしい。棺桶システムを二重に使うような意識波リソースを食う使用法は、さすがに無理があるようだ。

「谷に出れば、意識波の感度も上がるはずだ」とレビンは思った。遮蔽物もなく、どうやらいまは雪も止んでいるのが都合だ。それに、あの谷底なら、左右の山肌がうまく意識波を集約してくれるに違いない。立ち上がって、ふたたび表に出ようとする。

また見張りの二人に押しとどめられたが、レビンは言葉が通じないながらも、谷間の、自分が倒れこんだあたりを指さし、あの場所に行きたいのだ、という意思表示をした。

おそらく、この種族では若いのであろう二人は、異民族の娘のひたむきさに押し切られる形で、レビンが谷間に降りていくのに付き添う事になった。

レビンはちょうど自分が倒れこんだ位置に座り込み、目を閉じてコニトからのレビンのボディ操作を試みた。雪は完全に止んでいて、空には満天の星が輝いている。

底冷えする空気が逆に意識を明確にしてくれた。コニトの意識は見事にレビンの体に接続された。レビンはスウィンドタップの操作方法をコニトの意識にコピーし、

「コニト、この地域の基本情報を調べてくれ」と頼んだ。

「はい」というかすかな返事がされたことにレビンは驚く。ひとつの共用体の中で独立意識の対話も可能なのだ。

コニトを秘書のように使いながら、レビンは次々と必要な情報を入手していった。「これは使える」とレビンは新たな達成感を感じていた。

死体の意識に潜入する「棺桶システム」は、レビンの発案で研究開発が進められてきた。その開発過程は、警察の中にあっても異端だった。暫定的なプロジェクトを推進しながら、現場警察官としての職務と兼務する形で「棺桶システム」こと、意識波活用潜入捜査技術計画は、改良され続けてきた。

電磁鞭の開発も、エータ星人特有の格闘技術「トロンタ」を、いかに潜入した死体の姿で転用できるか？ という問いかけから生まれたものだ。いまでは「電磁トロンタ」という新しい現場格闘技術として、全署で自由選択の習得科目として制式採用されるまでになった。

この残留意識の活用技術も、棺桶システムの応用法として、かなりの用途展開が考えられるだろうとレビンは思った。

警察庁の盟約外行動規約を仔細に検討してみたが、自分が異星人であるという事を明かしたり、その星の文化レベルに著しい影響を与えるような技術転用をしない限りにおいては、明確な禁止事項は記されていないなかった。

それならば、とレビンは思った。狩りの技術を彼らに伝授すればいい。近辺の村落情報が宇宙警察の汎宇宙概儀に掲載されており、スワトニ星系の学者によるスーイットビジョンでの遠隔観察ですでに集団狩猟技術の発達が確認されている。この村では、まだ「組織だって狩りを行う」という事自体が行われていないようだが、それを指導してやれば事足りるだろう。近隣ですでに発生してる技術をいま伝えても、大きな過誤にはなるまい。

レビンはそんな事を考えながら眠りについたのだが、翌日、目を覚ましてみると、レビンの部屋の外には、このオイケニ村の民が全員集まり、レビンが出てくるのを、床にひれ伏すような姿勢で待っていた。

レビンは、それがこの村の「神」への祈りの儀式であることを、すでに昨日のアクセスで知っていた。レビンは、一晩で「神」のポジションに座らされていたのだった。

良く見ると、レビンに話しかけていた長老が、昨日レビンがスウインドタップと交信していた場所に座り込み、何やら瞑想をしているようだった。

長老の掛け声とともに、オイケニ村の全員が声を合わせて歌うかのように何かの言葉を唱えていた。

神の名は、口にできず。

ただ行いをいただくのみ。

本願は他力にありて、

我が肉体はかりそめの宿。

授かるものは、

生き延びる知恵。

われらオイケニ一族

神の命に従いて、

汲めども尽きぬ

知恵を飲み干すものなり。

レビンは、昨日ダウンロードしておいたオイケニ族の基本用語から、彼らの詠唱の意味がよく分かった。

「いまこそ、知恵をお授けください。コニトさま」と、一番近くにいるオイケニ族の若者が懇願していた。

「あなたさまは、葬花の上に降り立ち、葬花の上で祈った天からの使者。我々を正しくお導きください」と別の女性オイケニ族が叫んでいた。みな、この世で神に出会えた奇跡に

打ち震えているようだった。

「どうやら、昨夜レビンが自分自身の本体と交信していた場所は、この一族にとって、神と交信するための神聖な場所であつたらしい。いま長老が、同じように座しているのは、そういう事なのだろう。」

「偶然とはいえ、そのせいで私が巫女と見なされたのか。恐ろしいことだ。だが、彼らに狩りの技術を伝えるには、これほどありがたい状況はないな」とレビンは思う。

「オロン！」

とだけ、レビンはみなの前で叫ぶことにした。

オロンというのは、昨日レビンが口にした熱いスープの中に入っていた肉の本体だ。他の星系には、「豹象」という似た動物がいるがオロンは少し小ぶりだ。それでもオイケニ族の成人3人分程度の高さはあるだろう。巨大で鼻が長く、全体が体毛のおおわれている。オイケニ族をはじめ、この一帯では貴重なタンパク源だ。

オロンという言葉に、オイケニの一族たちは互いの顔を見合わせていた。意味がわからなかったのだろう。

レビンは急いで、小高い自分の洞窟から駆け下り、まっすぐに長老のところまで走っていった。皆があわてて道を開ける。

「オロンを、みんなで捕まえよう」

と、レビンはコニトの言葉で言った。

「ゆうべ、私は神から捕まえ方を聞いた。近くにオロンのいる場所がある」

その言葉を聞いて長老は意味を理解し、そして、周りの人間にその言葉の意味を伝えた。長老の説明に、皆は活気づき、いっせいに鬨の声を上げた。

## 5

オロンを捕獲するための武器や道具はある程度はそろっていた。しかし、彼らはオロンの生地の知識に欠けていたのだ。この厳寒の土地で、あてもなくオロンを求めて狩りをすることはできない。聞けば、日に一度、若い者たちが、思い思いの方角に出かけては、たまたま弱ったオロンを見つけた時に村に戻って人員を集め捕獲しているようだった。

「それ、だめ」とレビンはオイケニ族の言葉を、わざと片言で話した。

「なぜだ。俺たちには、それしかできない」

と、この四百数十人の村の若頭である、ヒョロリノは質問をした。

「神さま言った。オロン、東の谷にいる。そこまで行く。何頭もオロンいる」

若者たちは驚いたように声をあげた。どうも東の谷は彼らにとって出かけてはならないタブーの土地であるらしい。災いが降りかかると恐れだした。

「私聞いた。神から。神、守る。みんな。だいじょうぶ」

「神」という言葉に多少安心したようだったが、まだ、動揺は隠せない。

「聞け。これが神からのお告げなら、たとえ災いが降りかかろうと、やらねばならん。オロンが手に入れば、病の者も良くなるだろう。子供たちとて、ひもじい思いをさせずに済

む。いまは、この使われし巫女に従うのだ。それこそが神のお告げだ」

と、ヒヨロリノはみなを説得した。逆らうものも出てこない。それだけ信用がある、ということだ。良いリーダーだ。

レビンはこのヒヨロリノにチームリーダーを五人選んでもらい、全部で十八名ほどの捕獲部隊を結成した。

狩りは、夜中の三時に出発することになった。それぞれが松明を持ち、雪のやんだ雪原を歩く。松明は作り方から伝えなければならなかった。縄の数も少し少なかったので、急いで一、二本調達させた。緊急用の服が縄に化けた。油も松明に使ってしまったから、残りは少ない。オロンが捕まらなければ、このオイケニ族の村人たちは凍え死んでしまうしかない。レビンはその責任の重さをひしひしと感じていた。

「メリルナ爺の言ったとおりだ」

と、ヒヨロリノが話かけてきた。メリルナというのは、あの長老のことだろう。

「いつか、神の使いが来て、我らオイケニのユンダ一族を導き豊かにしてくれる。爺はいつも正しい」

ヒヨロリノは、メリルナをとても尊敬しているようだった。松明をかかげ、雪の中を歩きながらでも、ヒヨロリノが語るメリルナの言葉には温かみを感じられた。

「俺は爺が好きだ。だから、お前も信じる。オロンも捕まえられる。すべては神のお告げのままに」

松明を掲げ、雪の中をまっすぐに進むヒヨロリノの目には何の迷いもなかった。ただ、レビンには、ヒヨロリノの足取りに、自分を急ぎ立てるような気負いが感じられたのが少し気になった。

## 6

オロンという巨大哺乳類は、いたって温和な性格であり、このハレクリナ星特有のアジンという成分を含む「雪」を好んで食べる。

この東の谷は、そのアジン雪の積層地帯で、オロンたちの繁殖する重要なスポットでもある。

厳寒の星にあつてアジリンで育つことのできるオロンたちは、数多くの雪原系肉食動物の重要なタンパク源だ。オロンの敵は多い。

何頭ものルリオンやギョータに取り囲まれてはオロンに勝ち目はない。だから、群れからはぐれたオロンは敵に狙われると洞窟に逃げ込む。こうすれば対峙するのは一頭のみ。オロンの巨体なら、確実に踏みつぶすことができる。オロンを狙っていた肉食獣たちも、オロンが洞窟に隠れたらそれ以上追うことはない。ただ引き下がるのだ。

しかし、この習性を利用して、洞窟でオロンを待ち伏せ、オロンを眠らせるヨミロイ草でいぶして捕獲するという狩りの手法が近隣のヤパ族やゴーイヌ人たちの間では、すでに定着しており、オロンの肉を安定的に手に入れられることで、それぞれが文化圏をも生み出そうとしているほどだ。しかし、オイケニ族にそんな村はない。おそらくは、このユンダ族がこの「ヨミロイ狩り」の初めての使い手となるだろう。

レビンとヒヨロリノはオロンが逃げ込むであろう洞窟の一つに入ってヨミロイ草をいぶ

しながら、オロンが追い込まれるのを待っていた。他のメンバーがルリオンの毛皮を着て風に捕食者の臭いを流し、遠吠えの声真似をして、オロンを追い込む手筈だった。

遠くでルリオンの遠吠えの声真似が聞こえた。赤い煙が上がった。三差路になっている分岐点で、レビンたちのいる方の谷間にオロンが逃げ込んだという合図だ。待機していたメンバーたちも谷の斜面の上のけものみちを通って、この洞窟にやってくるだろう。

しかし、オロンが洞窟に飛び込んできた時、レビンは想定外の出来事に緊張せざるを得なかった。

オロンはメスで、子連れだったのだ。温和なオロンだが、子育て中はわずかな危険にも過激に反応する。子育て中のオロンには近づくなというのが、この狩りの鉄則なのだ。しかし、ウンタの人間には、そこまでの知識はなかったのだろう。

飛び込んできた母オロンはヨミロイ草で眠気が出てきたがゆえに、より一層凶暴になっていた。洞窟の中に入る事を拒み、子オロンを背に、洞窟の壁という壁を叩き回った。おそらくは眠気を覚まそうという気持ちと、レビンとヒヨロリノを威嚇するという事の二つの意味があったのだろう。洞窟の奥まで入ってこないせいでヨミロイ草の睡眠効果も薄く、よりいっそう母オロンを凶暴にさせているだけだった。

あまりの振動に大きな岩がレビンの上に落ちてきたが、よけられるタイミングではなかった。

と、その時横からヒヨロリノがレビンに体当たりをしてレビンコニトの体を落石から救った。

レビンは危機一髪で難を逃れたが、ヒヨロリノは大岩の下敷きになってしまった。母オロンはまだ暴れている。レビンはとっさに火のついたヨミロイ草を手につくと、暴れる母オロンに向かって走り寄り、振り回される長い鼻を避けながら、母オロンの背中へと飛び移った。自分の体の上った「敵」を振り払おうと、母オロンは長い鼻を背中のレビンめがけて叩きつけようとするのだが、そのたびにレビンは上手に鼻をかわし、代わりにヨミロイ草の煙を吸わせた。

強烈なヨミロイ草独特の甘酸っぱい香りに刺激されて、さすがのオロンも崩れるように、その場に倒れこんで眠ってしまった。

「ヒヨロリノ！」

と、レビンがヒヨロリノの横に駆け寄ったが、すでにもう虫の息だった。

「れ、お、おまえ、ここに、いては、いけない。いけ、みなに、教える、私、いけない、いけないこと教える、おまえ、ありがとう。命、わたし、そのため、使った」

ヒヨロリノは息も絶え絶えで、しゃべることさえ辛そうだった。

「わかった。オロンの捕り方はみなに伝える」

その時、洞窟の入り口にオロン狩りの残りメンバーが到着した。

結局ヒヨロリノは助からなかった。レビンは母子オロンは「捕まえてはならない」とメンバーに教え、目が覚めるまでそのままにすることにした。

大切なのはオロンを捕獲することではない。オロンの捕まえ方に習熟することだ。子供



オロンはそのまま育ててもらい、オイケニ族たちが捕まえるのは弱ったオロンや群れからはぐれてしまった弱いオロンだけにした方がよい。そういうルールが身につくようにレビンは、これらの「狩りの教え」を、オイケニの言葉で村の洞窟の壁面に書いていった。

ほぼ「狩りの教え」を書き終わったころ、コニトの意識からスウインドタップを覗くと、コツチュのアイバニーがハレクリナ星の上空に到着しつつあることが分かった。コニトの体も、この二週間の酷使で、かなり無理が来ている。

「私は巫女としての役割を終えた。天に帰ります。体は手厚く葬ってください」とレビンは長老に言った。

「わかりました。この日が来ることは、昔、ヨセイテの供物の神殿で、神への祈りをささげた時から心に留め置いたこと。ヒヨロリノも役割を終えて安らかに召されたでしょう。ともに神殿を立てて狩りの教えとともに守り続けます」

と長老は言った。信心深いことだとレビンは思いながら、供儀の神殿にコツチュが到着したのを見計らって、コニトの体から脱出した。

8

「しかし、師匠の突っ走り癖にも、困ったもんだよなあ」とコツチュは一緒に来たテンポとともに、棺桶システムとの通信で眠ったような状態のレビンの姿を見ながら、ぼやくようにつぶやいた。

「この方の能力は、総本部監視正に匹敵するであろう」

テンポと呼ばれたガムル人の男は眠るレビンの姿を少し見上げながらそう答えた。

「それどころか！ 科学搜研のトップだってかまわねえぜ」とコツチュは不満げに付け足した。

「うむ？ お帰りのようだ」

レビンの胸に抱えられていたスウインドタップが青く光り、レビンの体がわずかに動いた。

「それにしてもデカイスウインドタップだよな。この中にひと部屋分システム入れちまつたんだろ？ とんでもないぜ」とコツチュが軽口をたたいているうちに、レビンは目覚めた。

迎えに来たのが、鞭術の弟子二人である事を見て、警察の規則の隙間を縫って二人が駆けつけてくれた事をレビンは感じ取った。

「すまんな、通常業務に支障を来たさせたか」

「良いのです。さあ、戻りましょう。ロメーナで来ていますから、現地人の目にも触れないはずですよ」とテンポはせかさすように言った。

「うむ」とレビンはつぶやいて、石の棺から、体を出し、自ら棺の蓋を閉めた。もう、ここには入れるべきコニトの死体はない。

石棺の蓋を閉めた時、そこに、あのオイケニ族の文字で何かが書かれていることにレビンは気づいて驚いた。あの長老の残したものだったのか？

棺に書かれている文字を読んで、レビンは心の底から驚いた。

アジン・レイネンズルエ

レイネンズルエはレビンのフルネームだった。  
極寒の神殿で、レビンは、その不思議に立ち尽くしていた。